

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第九号



女子フィギュアスケートは、トリノでの荒川静香選手の、スケートをはいたパレリーナのような演技によって初めて、スポーツであると同時にほんとうの芸術になりました。世界中の人々が彼女に賛嘆の声をあげたのはだれもが知っています。たとえば、氷上のエレガンス。スパイラルは極上で、スケートティングは荘厳だった(A.P.)、すばらしい一言(新華社通信)、「氷上のプリンセス」(イタリアの全国紙スタンプ)、「日本語を話す東洋の女神がバラベラ(競技場)に新しい息吹を吹き込んだ」(イタリアのスポーツ紙カゼッタ・デロ・スポルト)というように、世界中がほんとうに喜んでいました。

そしてたぶんあの映像がのこるかぎり、百年先、二百年先の人たちの魂を奪うことにもなるでしょう。彼女の四分間の演技はいま、人類共通の財産に、遺産になったのです。

なかでも何よりも大切なことは、バラベラの女神を育てあげたのは仙台の民営リンクだったという事実ではないでしょうか。仙台にリンクがなかったら、たぶんあの上品で美しく、正確で力強い演技は生まれにくかったのではないかと。こうしてわたしたちは、民営であるか公営であるかとはかくとして、公の施設がいかに豊かな未来を育むかを、いまたしかに理解しました。合理化や効率化は明日の利益は計算するけれども、未来を見ているとは言いがたいことも気がつきました。

スポーツの成果は、今日やった結果が明日にはわかるというものと計算が合わないものなのです。この事情は博物館や美術館や図書館でも同じようなもので、そして文学館においてもまた然り、文化を育てるにはスポーツ以上の時間がかかります。

わたしたち日本人が、たとえばスポーツや文化で、世界の人たちに貢献することができるようになるには、いまは損をしなければならないように見えるスポーツや文化の施設に、もっと力を注ぐ必要がある。そのことをはっきりと示したことでも、荒川選手の功績はじつに大きい。彼女にリンクを与えた仙台に、わたしは脱帽して最敬礼をいたします。

仙台に脱帽

仙台文学館 館長 村上研一

ことばとその周辺

第九回

仙台周辺でなく文学にかかわる活動に取り組んでいるクループを紹介するコーナーです。

仙台白百合学園高校文芸部

「体育会系」文芸部!?

白百合学園高等学校文芸部三年生の及川祐依さんによれば、「うちが文化部ではなくて運動部」なのだそうだ。「だから、心が弱くて傷つきやすい私にとっては、辛いんですよね」と、横で松浦明美さんがペロリと舌を出す。

「詩のボクシング」高校生全国大会に出場して準グランプリに輝いた松浦さん。作品が書けるとすぐに顧問の平井みどり先生に見せるのだが、なかなか合格点はもらえない。「一本当はもつと書けるはずなのに、気合いが足りないからよ」と笑う平井先生に、松浦さんは「いきなり×を付けられて、心は傷だらけ(笑)。でもその傷が次の作品を書くための力になるんです」。まるで運動部並みのスパルタ式、と語る様子が見えぬ。松浦さんは「絵本が大好きな」と、及川さんは「『怒り静かに本を読み自分の世界に浸る、なんてこと全然ない』(及川)、「そんな気取ったことしてたら、みんなにぶつ飛ばされちゃいますからね(松浦)」と、白百合学園文芸部はあくまでも活動的だ。



左から松浦明美さん、平井みどり先生、阿部紗百合さん、及川祐依さん。そして、学園祭の展示のために制作したオブジェ。



部新の部、発行の最号の第九部。三文と古史はも

出来栄えて、「全国高等学校文芸コンクール」部誌部門では優良賞受賞に貢献した。短編「フラッシュ」が直木賞作家の熊谷達也さんの目に留まったことをきっかけに、書くことにもめり込みつつある。

賑やかな彼女たちの傍らで、見守るように微笑んでいた阿部紗百合さんは、「一見おとなしそうですが、芯が強い。『詩のボクシング』全国大会では、特派員として厳流島まで同行。炎天下をものともせず取材し、しっかりとルポをまとめた。『暴走キヤラの及川や私たちがどんなにしゃやいでいても、冷静に気配りしてくれて。阿部さんがいないと文芸部が成り立たないんです」と松浦さん。

「怒り静かに本を読み自分の世界に浸る、なんてこと全然ない」(及川)、「そんな気取ったことしてたら、みんなにぶつ飛ばされちゃいますからね(松浦)」と、白百合学園文芸部はあくまでも活動的だ。

「いっただって、やれるならやってみなさい」と挑発してくる「平井先生の教えの賜だろうか。(T)」

●問い合わせ先
電話(022)777-5777
仙台白百合学園高等学校

学芸室日記

●今、「朗読」がブームのようです。十一月十三日に当館で開催された「仙台朗読祭二〇〇五」は、「詩のボクシング」に出場した有志が企画した一般参加のイベント。「上手な朗読よりも『あなた』の朗読を求めています」をキャッチフレーズに参加者を募集したところ、予想を上回る四十人近い方々が集まりました。自作の詩や童話、お気に入りの小説の「節」などを「読む人」、それを「聞く人」の静かな熱気が会場を包み込みます。声に出す心地よさはもちろん、その空間の雰囲気も朗読の魅力なのかもしれません。

●十二月九日、当館一階エントランスロビーを会場に、東京を拠点に活動する表現ユニット「しずくまろ」の公演が行なわれました。演目は三島由紀夫原作「卒塔婆小町」。役者三人だけのシンプルな舞台上に寄り添うのは、アイリッシュハーブやピアノの哀愁を帯びた音色。そんな「夢と幻」の空間に身を浸した後は、現実



幻想的な三島ワールドが繰り広げられました

世界に戻るのが少し惜しいようなひとときでした。

●「佐藤虎房展」のイベントとして一月十九日に開催した「鬼房忌記念俳句大会」。本来ならば見当たらぬ方々が見当たらぬ方々、実はこの日講演をお願していた俳人・金子兜太氏が直前にインフルエンザに罹患、急な予定変更となったのでした。幸い金子氏には二月二十六日に改めてお出でいただくことになり、心待ちにしていたお客様で当日会場は大盛況。金子氏の来館を今か今かと待っている、なんと詩人の白石かずこ氏の姿を発見!白石氏は前日、せんだいメディアアテックでの朗読音楽書のコラボレーション「ことばの庭」に出演。一夜明けて、ふたから親しい金子氏に仙台で会うのも興と来館されたのです。入口で「張ついていた白石氏に、到着した金子氏もびっくり。長く第一線で活躍する俳人と詩人のゴージャスな2ショットが思いがけず実現しました。



仙台文学館にて 魅惑の邂逅

●ちょうどその日、一階エントランスロビーには、白石氏の詩「仙台メトロ ギリシャ通り」を墨書した、長い帯のような和紙が飾られていました。岩手在住の書家・沢村澄子氏の作品です。沢村氏は「ことばの庭」のプレイベントとして二月十九日に書のワークショップを行い、その参加者の方々の作品も館内のガラス面ににぎやかに演出してくださいました。



寒い夜に屋外で書いた、という作品は圧巻でした

高村光太郎・智恵子展

その芸術と愛の道程

光太郎の詩や彫刻作品、智恵子の文章や紙絵など様々な資料をおして、愛と芸術に生きた二人の生涯をたどりま。

4月15日(土)~6月25日(日)

『ケインとアベル』

「ケインとアベル」を購入したのは、待ち焦がれた作者の新作だったからだ。

わたしは十代のころから、相当な本好きを自任してきた。「小遣いに限りがあるうとも、麻雀に使うカネと、本代だけは断じて惜しませず」

社会人になるなり、胸を張って広言した。

麻雀は、勝てば小遣いが増える。が、本代はカネが出て行くだけだ。ゆえにひどい本を買ったときには、おのれをのしった。何度も手痛い思いを繰り返したことで、次第に勘が働くようになった。表紙を見ただけ



で、これはいける、この本はダメと、耳元でささやきかける「勘」がある。そしてやがては「作家買い」を始める。これと決めた作家の新刊であれば、ためらうことなく買う。たとえハズレを引いても文句を言わないのが、作家買いの大原則だ。

アーサー・ヘイリー。フレデリック・フォーサイス。ハドリー・チエイス。クライブ・カッスラー。A・J・クイネル。ジョン・グリシャム……。

思いつくままに挙げて、何人も作家が並ぶ。いずれもかつて、あるいはいつか

まだに、作家買いを続ける作者のリストだ。「ケインとアベル」の著者ジェフリー・アーチャーも、作家買いをするひとりだ。この作者と初めて出会ったの



は「百万ドルをとり返せ(NOT A PENNY MORE, NOT A PENNY LESS)」だった。

読み終わったとき、この著作の原題が重要なプロットであることに気づいた。その物語構成の卓抜さゆえに、一作を読んだだけで、次作を待ち焦がれる作家リストのトップに座った。

次作は「大統領に知らせますか?」

前作以上に面白かったがために、ジェフリー・アーチャーは「作家買いリスト」に、太字で記されるに至った。

「次はいつか女を書くのか」わたしに限らず、アーチャー作品を読んだ同好の仲間たちは、新作を待ち焦がれた。一九八一(昭和五十六)年四

月下旬。ゴールドマンウィークを目前にして、母が急逝した。日曜日の未明に心臓発作を起し、母は救急車で搬送された。そのまま意識を回復することなく、日付が変わった直後の午前一時前に旅立ってしまった。

救命治療の病室に入ることかなわず、別れの言葉ひとつ聞けずの別れだった。

初七日の法要が過ぎたあと、わたしは大きな虚脱感とも、わたしが大きな虚脱感とも、なかでも、母が元気なときになにとつ孝行をしなかったことへの悔いは、わたしに重たのしかかった。まさか母がこれほど突然に亡くなるとは、考えたこともなかった。

孝行したいときに親はなし。この言葉の意味を、何度も何度も噛み締めさせられた。その都度、一步を踏み出すことすら億劫に感じられた。



『ケインとアベル』ジェフリー・アーチャー 永井 淳 訳 新潮文庫

書店をのぞく気になったのは、四十九日が過ぎたころだった。六月中旬で、夏を思わせるほどに暑かった日の午後。わたしは久しぶりに書店に入った。新刊本の発売広告には、母の急逝後はまったく見ていなかった。ゆえに文庫本のコーナーに向かったのも、格別に目当ての本があったわけではなかった。

「ケインとアベル」は、題名から聖書の登場人物を連想したことでも手に取った。それがジェフリー・アーチャーの新作だと分かったときには、胸が高鳴った。おふくろを亡くして以来、気持ちに弾みを覚えたのは、このときが初めてだった。

当時のわたしは、販売促進企画の売り込みに従事していた。販促アイデアの立案には、同僚のだれにも負けないという自負があった。が、母の急逝後は気がおろさず、スランプ状態だった。「ケインとアベル」を購入したときも、営業に向かう力がわかず、暑さ連

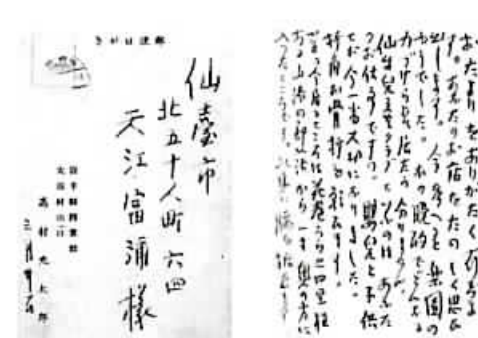
れで書店に入ったままであった。上下二冊を買い求めたわたしは、書店近くの喫茶店に入った。そして、軽い気持ちでページをめくった。読むつもりはなく、冒頭の数行に目を走らせようとしただけだ。

した文庫本である。読書の楽しさを思い出した。しかも、新作を何年も待ち焦がれていた作家なのだ。何杯もアイスコーヒーを注文し、夕暮れまで居続けをして上巻を読み終えた。下巻は会社から帰宅後、一氣に読んだ。

終えたときには、すっかり明るくなっていた。物語のおもしろさも、もちろん特級だ。それに加えて、読んだときの状況が特別だった。あなたの一冊はと問われたら、わたしは迷わず「ケインとアベル」を挙げる。



山本一力(作家) 1948(昭和23)年、高知県高知市生まれ。旅行代理店、広告制作会社、コピーライター、航空会社関連の商社勤務などを経て、1997(平成9)年、「善徳」で第77回オール讀物新人賞を受賞。2002(平成14)年、「あかね空」で第126回直木賞受賞。他の著書に「ワシントン・ハイウェイの嵐」「だいたい」「銭売りの書」「辰巳八景」「時越え」など多数。



天江富弥に宛てた高村光太郎の葉書

本多 真紀 (仙台文学館学芸員)

「おたよりをありがたく存じます。あなたのお店をたのしく思ひ出します。今考へると楽園のやうでした。あの晩酌でどんなに力づけられて居たか分りません。／仙台児童クラブといふのはあなたのお仕事ですか。嬰兒と子供とが今一番大切になりました。／折角お骨折を願ひます。／小生の今居るところは花巻から三四里程ある山添の部落から一寸奥の方に入ったところす。此処に腰を据えます。」(昭和二十一年「推定」三月二十一日付)

詩集「智恵子抄」で知られる詩人・彫刻家の高村光太郎(明治十六、昭和三十)

は、第二次大戦中多くの戦争詩を発表するが、昭和二十年四月に空襲で東京のアトリエを失った後、十月に岩手県花巻郊外の山小屋に移り住む。そこから投函したこの葉書の宛先は、仙台の天江富弥(明治三十二、昭和五十九)。天江は、大正時代にスズキヘキと童謡専門誌「おてんとさん」を創刊、地元の児童文化運動を担い、また多趣味な文化人としても知られた人物である。昭和二十一年三月、天江は子どもたちの様々な活動を行なう「仙台児童クラブ」を結成、この葉書はその報告への返事と思われる。

文面にある「あなたのお店」は、造り酒屋の三男で

あった天江が、昭和八年、東京・上野に開店した「勘兵衛酒屋」を指す。けしや民具が飾られた民芸風の酒場には多くの文化人が集い、高村もその常連客の一人であったという。天江は当時の高村の様子を、「先生は、奥さんが思っでいらっしやるさびしさで、毎晚上野の山を横切って私の店にしづかに手的をされてお出ででした」と回想している。まさにこの頃、高村は詩作も彫刻もなげうち、精神に変調をきたした妻智恵子の看病に全神を傾けている時期であった。そんな折に勘兵衛酒屋で過ごす時間がいかに高村の心身を癒したかは、葉書の「あの晩酌でどんなに力づけ

られて居たか分りません」という一文から見えてくる。

やがて昭和十三年に智恵子は死去、勘兵衛酒屋も戦争の影響で昭和十八年に閉店する。その後、敗戦という大きな転換点を経て、自己の再生を試みようとする高村は、この葉書を書きながら、勘兵衛酒屋に通った日々を懐かしく、また一方で智恵子の開病や戦争とも重なる複雑な記憶として思い返したのではないかと推察される。高村と天江、勘兵衛酒屋とのつながりを伝える一枚の葉書にも、詩人の激動の半生が凝縮されているようである。

*当館所蔵の天江富弥の筆名「光太郎先生」の葉書。

「平家物語の女たち」

輝くことば

こんにちは。宮尾登美子です。今日は、NHK大河ドラマ「義経」にちなんで、平家物語とそこに登場する女性たちのことを皆さんにお聞きいただいて、女の生き方というものを一緒に考えていきたいと思います。

私が平家物語を初めて読んだのはまだ女学生の頃でした。そのことばの美しさとか構成の素晴らしさとか面白さにすっかり魅せられて、将来きつと自分の手でこの物語を訳したり、自分の考えも入れて書いてみた



「宮尾登美子」にて

のしたにも都のさぶらふぞ（波の下にも都がございませ。そこへお連れします）と答える。また、平家の勇将、平知盛——私は平家の男性の中で知盛が一番好きなんです——が、「見るべき程の事は見つ——と海に飛

い、とすつと思っておりました。平家物語の中でも私が一番好きなのが、壇ノ浦の合戦の場面です。これまでに何度も訪れてみましたが、その度に「この海の底に平家の女性たちや武将たちが皆、沈んでいるのか」と胸一杯の思いですつと見つめてきたものです。

大河ドラマでいえば松坂慶子扮するところの尼御前（時子）が、安徳天皇を抱いて海に身を投げる場面。「尼ぞ、われをばいづちへ見してゆかむとするぞ（尼御前、私をどこへ連れて行くのか）」と尋ねる安徳天

女たちに名前を付ける

私が平家物語をどうしても書きたいと思ひ詰めたのは、このように文章が非常に美しいということ、構成力があること、そして日本の古典の中でも、ダントツに国民に受け入れられた物語であることが理由です。けれどもそれ以上に理由があります。それは、平家物語には「女の人」が一つも出てこないという点なんです。

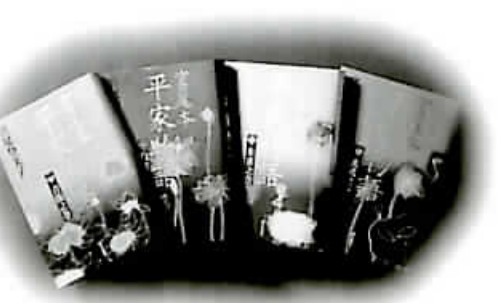
原作を読みました。関連の系図も見ました。そこには男の名前が載っており、その脇に彼を産んだ母親が記されて

び込む。この世で見なければならぬものは自分の目で見てしまった、今さら死ぬことに何の未練があるのかと、非常に潔いことばを残して死ぬんです。すばらしいでしょう？ 最高の輝きを持った言葉が、ここに散りばめられています。壇ノ浦の死に際の場面でのこの二つのことばが私は特に大好きで、時々目ざさんでいるほどです。

いますが、それは名前ではなく「位」です。女はただ「女」。女、女、女。ですから私が最初に考えたのは、「この「女」たちに私が全部名前を付けてあげようということでした。名前を付けて、一人一人の人生をたどって、自分だけの平家物語を書こう、これが始まりでした。そう決心したのは女学校の時、今でいえば中学三年生ぐらいのときでした。

それからすつと心の中で、自分がこれを書かなくちゃいけないと思ひ詰めて今日までやってきたのですが、その他にも書きたいものがいっぱいあって、それをつづ書いてきたら、なかなか平家物語を書く順番が回ってこない。これではいけないと思ひ、とうとう書き始めたのが、七十三歳の時でした。

とここで、すつと疑問だったことがありました。それは、鴨越の坂落として有名な一ノ谷の合戦の時に、平家の女たちはどこにいたんだろう？ ということ。部落ちした平家の一族は、浜



「宮尾本 平家物語」全4巻 2001年～2004年 朝日新聞社刊

宮尾登美子

は、女が戦争に関わった、日本でも最初の姿だったんじゃないかと思うのです。

平家が勝つと思つて海上で待つていたのに、男たちは敗走して助けを求めて船にすがりついてくる。満員の船が三艘も沈み、船に取り付こうとする腕を切り落として払いのける。こんな悲惨極まりない戦争の光景を、平家の女たちは目の当たりにしたのでしょう。

けれどもこれまでの平家物語は、この女たちのことを誰一人描いていないのです。

戦場でも皆一緒に行動していた平家の女たちに比べて、源氏の場合には対照的ですね。頼朝が鎌倉で旗揚げをしたとき、女房の北条政子は子どもと一緒に避難させています。

安徳天皇は本当に男？

平家の女たちがどうしてこんなに結束が強かったかという点、平家の総帥平清盛の奥さんである時子の力が強かったからといえるでしょう。

平家物語の中に登場する女性の中で、唯一名前が付いているのがこの時子ですから、たいした女性です。私は彼女が大好きです。

時子は身分の低い貴族の娘でしたが、清盛が通ってくるようになってやがて子どもをもう

ける。清盛は京都の西八条に立派な屋敷を建て、別の女性との間に生まれた子どもたちも引き取って、時子に育てさせました。

平家物語では「玉のべたらん建物」と描かれたこの屋敷で、時子は母親代わりとなって八人の娘たちを教育します。歌を作らせ、管絃を習わせ、お姫様として映けたのです。そして、関白や太政大臣はじめ有力貴族に順番に嫁がせました。「おごる平家」とはいいますが、平家が力を得たのは、こうした時子の才覚によるものも大きいのです。

相手を好きか嫌いかわからない結婚させるなんてと肩をひそめられるかもしれないが、女が就ける職業というものがなかった時代ですから。平家物語の女の生き方を追究するならば、「相手がどんな男でも位さえ高ければ一生安楽に暮らせた時代」を考慮しなければなりません。でもやっぱり、社会が悪かったと思うのよね。

さて、この時子が自分の産んだ娘徳子を高倉天皇に、かなり強引なやり方で嫁がせる。清盛が推す候補を押しつける一方、器量も才もパツとしない上にそもそも自分自身が乗り気ですらない徳子の首根っこをつかまえ、「わが平家のため」と尻を叩いて宮中へ送り込む。

イベント 「ことばの広がり」

～日本と中国の詩人が語る～

出演/谷川俊太郎、田原(ティアン ユアン)、和合亮一

初雪が舞う屋下がり、日本と中国の3詩人による異色の顔合わせトークイベントが開催されました。

東北大学で教壇に立つ田さんは、「谷川俊太郎論」で文学博士号を取得して2冊の訳詩集も出版したほどの「谷川通」。田さんが日本語の詩を中国語に翻訳するときの難しさを語れば、谷川さんは、「官僚詩人」が幅をきかせていたひと頃は打って変わって、様々な表現や主題が試みられている最近の中国詩壇の状況をユーモアをまじえて紹介してくださいました。

司会役の和合さんも翻弄されるほどの軽妙なやりとりで、会場が沸き続けたひとときでした。



左から、和合さん、谷川さん、田さん

平成17年12月3日に開催されました。「現代詩手帖」3月号に黒誌の内容が掲載されています。



宮尾登美子(みやお とみこ) 作家。1926年、高知県生まれ。62年、前田とみ子名義で発表した処女作「連」で婦人公論女流新人賞。73年「櫻」で太宰治賞。79年「一松の琴」で直木賞。83年「序の舞」で吉川英治文学賞。89年、紫綬褒章受章。その他「蔵」など、映画やドラマ化された作品も多数。

たことでしょう。それでも皆、最期まで一緒だった。この結東の堅さは、時子の權威と力によるものだったと思うのです。平成十七年九月十三日の講演の要旨をまとめたものです。

佐藤鬼房の句帖

その創作姿勢

加井洋樹 (仙台文学館学芸員)

生涯のほとんどを塩竈で過ごした俳人、佐藤鬼房は戦後俳句界をリードした一人として知られ、平成十四(二〇〇二)年に亡くなるまで十四冊(うち一冊は没後刊行)の句集を残した。ご遺族のもとには数多くの資料が保存されているが、なかでも作品が書き連ねられた句帖は鬼房の創作過程がうかがえる貴重な資料である。

鬼房は「泉洞書房」と名づけた小屋で句作に励み、詠んだ句はことごとくB5判の大学ノートに横書きで書きとめていた。句会などで作られた作品も後日丁寧に記され、鬼房がこれら



佐藤鬼房 1919(大正8)～2002(平成14)

の句帖を何度も手に取り読み返していたことは、その使い込まれた様子からも明らかである。ここでは鬼房が胃を切除するなどの大病を乗り越え、平成五年に蛇笏賞を受けることになった第十句集「瀬頭」に収録された作品が書かれた句帖二冊をもとに、創作の姿勢を見ていきたい。

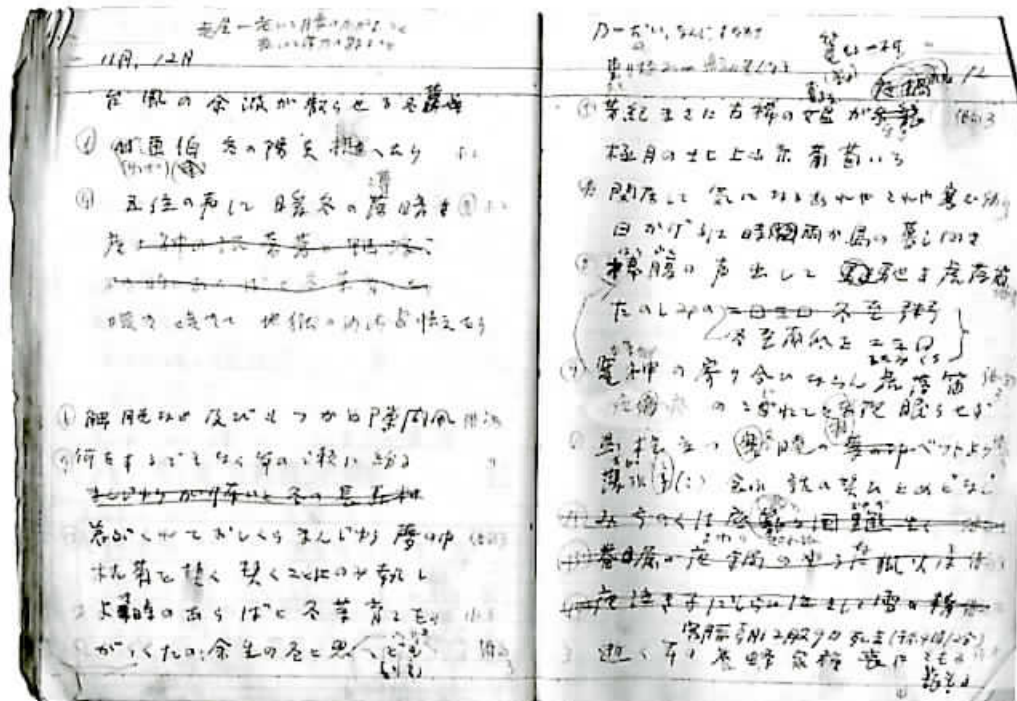
表現へのこだわり

句帖の二冊は表紙に「火宅抄」とあり、平成元年から二年の約八〇〇句を記し、もう二冊は「幸矢抄」と題し、平成三年の約五三〇句が収められている。二冊とも作られた月ごとに句が並び、古い万年筆または黒のボールペンで書かれた句は、一部、手が加えられた跡が見られ、修正ペ



鬼房の句帖
使い込まれた
様子が見える

で塗りつぶした上に書かれたものもある。だが、作品のほとんどは迷いもなく一氣に書かれていることから、頭の中で十分に言葉を思い巡らせ、完全な形にしてから句帖を手にしたと思われる。句帖の余白には辞書から写した漢字や語句の説明が多数書き込まれており、鬼房が感覚的に言葉を使わず、より正確な表現に腐心していたことがわかる。鬼房の表現へのこだわ



句帖「火宅抄」平成2年11～12月のページ。右ページ下に「みちのく」が書き込まれた部分が見える。修正を加えた上に抹消線が引かれている。

りは、五十年前に作った句に手を入れようとした逸話からも垣間見られるが、句帖には推敲の過程がはつきり残されている。

鬼房が見た「無辺の光」

たとえば、「瀬頭」にある(鳥帰る無辺の光追ひながら)は、句帖と初出である俳誌「小熊座」(平成元年五月号)では(鳥帰る無辺の光追ふごとく)であった。この「追ふごとく」の部分が「瀬頭」の編集段階で「追ひながら」と変更されている。これによって当初の形と比べ、鳥が「無辺の光」に向かって飛ぶ様子が際立ってくる。この句が仏教世界を意識して作られたことは、句帖の余白に「無辺」限りなく廣大「無辺光」その光明が十方世界照らして辺際のないもの」との書き込みがあることからも明白だが、その背景には、鬼房がこの頃、胃やすい臓などを摘出する大病を経験し、死を意識したという事実があった。そのうえで、「追ふごとく」をより意志的な「追ひながら」に手直したことによって、「無辺の光」を追う鳥の視線は鬼房の視線と重なり合い、闘病を経て自らの生死を明確に認識した鬼房の姿が句のなかに浮かび上がってくる。

「底知れぬ」力を描く

鬼房の代表句の一つ「みちのくは底知れぬ国(大熊生く)」も当初の形に直しが入れられている。平成二年十二月、この句が作られた当初は「みちのくは底籠る国(黒熊生く)」であった。しかし、句帖の上で「底籠る国」は「底光る国」に変えられ、さらに「底知れぬ国」へと修正されている。また、句帖にはこの句の初出となった「俳句」編集部に送った原稿の控えが挟み込まれているが、「12月24日完了」と注記があるこの原稿上で、「底光る国」と書いた部分は消されて「底知れぬ国」へと書き換えられており、「俳句」(平成三年三月号)では「みちのくは底知れぬ国(黒熊生く)」として発表された。

ところが、句帖では、この句は赤ボールペンの二重線で消されてしまい、翌年一月に改めて次の「幸矢抄」と題する句帖に書き込まれるのである。つまり、十二月二十四日に一応の完成をみた句は、「俳句」誌上に出ることになってからも、年末年始を挟んでさらに推敲されていた。しかし、改めて句帖に書かれた句は、消された時と同じ「みちのくは底知れぬ国(黒熊生く)」であった。考え抜いた末、やはり同じ形に落ち着いたのだろうか、新しく書き込まれた句の「黒

熊」の「黒」には鉛筆で丸がつけられ、「あとでトル」と記されている。さらなる推敲を経て、まだ納得のいく表現ではなかったのである。これまで書き込んだ後はほとんど訂正もなく、完成した句に迷いがないかのような鬼房にしては、珍しく言葉を選びあぐねている。

この後、「瀬頭」収録形の「大熊」に改められる経緯は、この句帖からは不明だが、「底知れぬ」力を秘めた「みちのく」に生きているものの象徴は、ごく一般的な「熊」や「黒熊」では不十分であり、「大熊」でなくてはならなかった。そしてまた、創作にみなぎる自分自身の「底知れぬ」力を表すためにも、鬼房は、この言葉にたどりつくまで迷い、こだわり続けたのではないだろうか。

これらの句帖の作品をもとにした第十句集「瀬頭」で鬼房は蛇笏賞を受賞し、その「受賞のことは」で「永遠の飛翔願望が私のすべてを支える」として、「誰のためにでもなく、ひたすら私自身に克つたたいを続けて行くだけだ」と記した。句帖には、その言葉のとおり、表現を極め、永遠に尽きることのない創作の意欲を持ちつつ、「ひたすら私自身」に向き合い、「たまたか」いを続ける鬼房の姿が現れている。

文学のある風景

「風のシンフォニー」仙台市地下鉄台原駅

気付いていらっしゃいましたか? 台原駅のプラットフォームから改札へ向かう途中の大きな壁の、「風のシンフォニー」。閉鎖的で単調な空間になりがちな地下鉄駅構内に潤いと賑わいを、と地下鉄開業に関わった各種企業の支援で設置された意匠壁です。



ああ 風が吹いてみる 涼しい風だ
草や 木の葉や せせらぎが
こたへるやうに ざわめいてある
あたらしく すべては 生れた
露がこぼれて かわいてゆくと
小鳥が 蝶が 晝に高く舞ひあがる
立原道造 「朝」より



デザインテーマは「大地の息吹」。台原森林公園の樹々と風をモチーフに、仙台の伝統工芸である「埴焼」の発祥の地が近くにあることにちなんで、素材に陶板を使用しています。目を凝らすと鳥たちが集う姿がトロンプ・ルージュ(だまし絵)として浮かび上がるという仕掛けです。

添えられているのが立原道造の詩。

「台原の豊かな森が未来まで美しくあれ、との願いを託した」と設計会社では語っています。

仙台文学館にお越しになる機会があったら、今度は地下鉄をご利用になってみてください。「風のシンフォニー」に見送られるように森林公園を散策しながら30分。やがて木立の間から文学館の白い建物が見えてきます。(T)